

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370089

研究課題名(和文) 朝鮮前期士大夫の民族文化観形成－対外・対内経験との関わりから

 研究課題名(英文) The outlook on racial culture formation of the earlier period of Korean'sadaebu'  
From a relation with the experience in outlook on racial culture formation

研究代表者

野崎 充彦 (NOZAKI, MITSUHIKO)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：50244629

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：1.朝鮮士大夫のアイデンティ確立を道統、つまり朱子学的世界における師弟関係の成立過程に見出せる。そこで、朴世采の『東儒師記録』など代表的な道統書における人物の取捨選択の様相を分析し、その成果をまとめて「朝鮮道統形成の一側面－『東儒師記録』を中心に」として発表した。

2.朝鮮風水思想の変容を風水師の活動に焦点をあてて各時代別に考察し、それが現代韓国にまで及んでいることを分析し、その成果を韓国道教学会主催の国際シンポジウムで発表した。

研究成果の概要(英文)：1.We can find establishment of korean'sadaebu's'identity in 'do-to' which means teacher and students relationship of 'shusigaku'world.

Hence,we analyse key persons in 'Pak seche's <touju-siyuroku> and so on. And we wrote the report < one side of korean confucian tradition>.

2.We focused on the activity of the geomancer and considered transformation of the Korea feng shui thought according to each time and analyzed that it extended to modern Korea, and announced the result at a Korean Taoism international symposium hosted by a society.

研究分野：朝鮮伝統文化論・古典文学

キーワード：朝鮮 士大夫 朱子学 道統 伝統文化 風水

### 1. 研究開始当初の背景

前回の科学研究テーマである「近世朝鮮儒者の民族アイデンティティをめぐる言説東アジア諸地域との比較から」では、主に15世紀の士大夫の言説を中心にアプローチし、それなりの成果をあげることができた。しかし、それだけでは自ずと対象となる範囲が狭く、特に対外的な要素に対する考察が不十分であった。また、様々な民間信仰や民俗宗教の発展生成過程には資料の制約上、深く踏み込むことは困難である。その限界を超えるためには、それまでの研究成果を踏まえながらさらにそれを発展させ、国内外の多様な資料と視点から朝鮮の民族アイデンティティ形成過程への考察が必要となった。

### 2. 研究の目的

朝鮮のセルフイメージは如何にして形成されたのだろうか？朝鮮は初めから自明のものとして朝鮮であったわけではない。民族文化の形成は士大夫らを中心とする知識階級の知的営為の産物として定着していったものだが、その道程は決して平坦なものではなかった。なぜなら、民族文化を構成する個々の対象への評価軸には国内のみならず、対外的な要素も大きく関わっていたからである。本研究は、前期朝鮮社会において、自国の民族文化に対する評価軸にはどのようなものがあったのかを対内・対外的な視点から考察しようとするものである。

### 3. 研究の方法

(1) 朴世采の『東儒師友録』を代表とする朝鮮儒統書の成立過程を、『韓国文集叢刊』所収の朝鮮士大夫の文集や『朝鮮王朝実録』の関連記事を丹念に渉猟しながら考察する。

朝鮮儒統成立については時間的にも空間的にも長大で複雑な事象を対象とするため、ここで扱ったのはそれぞれ「九牛の一毛」でしかないが、そのわずかな作業を通じて、謂わゆる儒統なるものが決して確固不動たるものではなく、時代によって常によって変遷することがわかる。また、師弟関係も必ずしも明確ではなく、掌教人のように「つなぎ」の役割に過ぎない場合もあるが、儒学の継承と発展において必要不可欠な存在であった。『東儒師友録』の著者朴世采自身、学問的には尹根寿(1537~1616年) 金尚憲(1570~1652年) 朴世采(1631~95年)の系譜に連なりながら、成渾(1535~98年) 尹宣拳(1610~69年 金集門下 宋時烈の姻戚) 尹拯(1629~1714年 尹宣攀の子息)の学統にも深い関心を寄せ、少論の思想的な基盤を築いたとされる。

儒統なるものは漫然と眺めているだけでは無味乾燥な系統樹に過ぎないが、ひとたびその奥に分け入るならば、朝鮮儒学の小宇宙の深淵を垣間見ることができる。朴世采の『東儒師友録』にそのことを的確に把握することができるものと期待できよう。

(2) 風水思想などの民間信仰・民族宗教の変容過程を中世から近世・近代・現代に至るスパンで追いながら、その背後に潜む諸要因を分析する。

韓国の風水史を概観すれば、王朝の交代や遷都論のような国家的・社会的に反響の大きい事業と密接に関わることが少なくないことに気づこう。それを仮に「実践風水」と名づけるならば、このような実践風水の背景には、それぞれの時代ごとに指導的な役割を果たした風水思想のオピニオンリーダーたちが存在したことが目を引く。例えば、韓国風水の祖として仰がれる道誥(827~96年)がそうである。高麗の太祖王建の誕生を予言したうえ、「太祖十訓条」(王建の遺言)によれば、高麗の地勢の順逆(吉凶)に従い、欠陥のある地にはそれを補うため寺院などを建てる、裨補風水を施したという(『高麗史』巻一)。

続く朝鮮王朝では、かみウル遷都論争(1392~1402年)における河崙(当時、京畿道觀察使)をはじめとし、壬辰倭乱の直後、戦勝に靈験のあった関羽を祀るべく設けられた関帝廟(現在の東廟)の敷地選定(1599年)で活躍した朴尚義(科挙で選抜された地官)。また、非業の死を遂げた思悼世子の墓である隆陵の選定では(1789年)子息の正祖自身が風水を学んだうえで陣頭指揮したという。まがら朝鮮末期から近代かけては、かの李崐応(のちの大院君)に明堂の地を教え、みごと高宗・純宗の二人の国王を輩出させた地官の鄭万仁がいる。その「政敵」であった明成皇后(閔妃)が1866年から日本の陰謀によって惨殺される一年前の1894年まで、28年間のあいだに4度にわたり父親の墓所を移葬したのも、明堂の発福により権力の基盤を固めようとの願いがあったからだが、その背景に幾人もの風水師の暗躍があったことは贅言を要さない。或いは、村山智順の『朝鮮の風水』執筆に寄与した、全基応(朝鮮王朝に仕えた地官)もそれに加えるべきかも知れないが、ともあれ、かくの如く、高麗から植民地時代に至る各種の風水トピックでも繰り返されることとなったのだ。

日本の支配下にあった植民地時代ではさすがに表立って活躍した風水師は見当たらないが、下って現代韓国を見るならば、故朴正熙大統領をはじめ、解放後の韓国の名だたる政界人の墓所選定にあたったといわれる池昌龍氏がその筆頭だろう。斯界では他の追隨を許さない隠然たる力を誇りながらも、大人然たる風貌さながらに「静かな巨人」ともいうべきスタンスで、あくまで黒子的な立場を守り、世間の表沙汰になるような言動には控えめだった。それとは対照的なのが、六観道士の異名で知られた孫錫佑氏である。氏を一躍マスコミの寵児に押し上げたのは、94年7月に死去した金日成主席の命運を、前年に刊行した著書『地』において的中させたことにはじまる。

その著で氏は、金日成の 32 代祖である文莊公金台瑞（十三世紀の人物）の墓が韓国全羅道の全州市郊外にあるのだが、その墓の坐向（墓の向き）が「未坐丑向（南南西から北北東向き）であり、満 49 年の絶対権力を行使するようになっていく。49 年の根拠は七七の数で、天道によって地軸が開かれ...（中略）金主席が祖先の墓の精気を一身に受けた結果、1945 年から始まったその統治期間は 49 年のあいだ続くものの、94 年の陰暦 9 月 14 日の寅の刻（午前 3 時～5 時）にその墓の運氣が去るために、金主席の命運もそれから一年以内に尽きる」と述べたのである。しかし、そもそも金日成の正式な伝記（『金日成回顧録 世紀とともに』など）では、彼の本貫（先祖の出身地）は慶州金氏なので、全州金氏である金台瑞の子孫とするには無理があるし、49 という数字の由来も明らかではないが、理屈はどうであれ、結果的に「予言」が的中したわけで、韓国マスコミが騒然となったのも無理はない。

このような権力と風水の関わりはその後の韓国でも繰り返されることとなったが、その具体例を時代と社会の相関関係から読み解く。

（3）いわゆる士大夫文学の成立において翻案作業がいかなる要件のもとで可能であったのかを、具体的な作品分析（『金鑿新話』など）によって論証する。この作業を通じ、当時の朝鮮士大夫のセルフイメージをおのずから明らかにすることができよう。

翻案小説が成立するためには自国化、もしくは固有化の技法が必要となる。本稿は、瞿佑の「水宮慶会録」（『剪燈新話』、以下「水宮」と略称）とそれを踏まえた金自習の「龍宮赴宴録」（『金鑿新話』、同「龍宮」）や「龍宮赴宴録」を忠実に翻案した浅井了意「竜宮の上棟」（『伽婢子』、同「上棟」）を事例に、龍宮への移手段、龍神の娘の婚姻モチーフ、三水神の名称、妖怪・異物の名称、胡人採宝譚の痕跡などに注目し、考察を試みた。

「水宮」では船で移動するが、「龍宮」や「上棟」では馬なのは場所の設定による。つまり、「水宮」は海のそばだが、「龍宮」や「上棟」は内陸部の開城や勢田だったからである。ただし、「龍宮」では馬に翼があるが、「上棟」では無い。金自習は『太平広記』や『事文類聚』などによって『拾遺記』所載の周の穆王が騎乗した「挾翼」のイメージを転用したと思われるが、依藤太伝説を踏まえた浅井了意は不要のものとして判断したのかもしれない。

「柳毅伝」（『太平広記』所載）のような龍宮伝書タイプの説話に見られる龍神の娘の婚姻モチーフが「水宮」や「上棟」には無いのは、前者は舞台が海近くだったからであり、後者は日本では馴染みが薄かったためだろう。一方、「龍宮」では金自習が文献による知識を生かして取り入れ、そのみならず上

梁文に見られるような配匹至上主義を加えている。そこには金自習の個人的な思いがこめられていたものと思われる。

「水宮」では東海廣淵王のような海神であり、抽象的な名称であるのに対し、「龍宮」では祖江神（通津北部）・洛河神（臨津江）・碧瀾神（開城北部）など朝鮮の具体的な地名に比定しているのは金自習の固有化の方法によるものである。「上棟」では三神とも江の神・河の神・淵の神のように一般名詞的なのは「龍宮」の朝鮮の地名が読み解けなかった結果であろう。

「水宮」で描かれる妖怪・異物はすべて水の属性なのに対し、「龍宮」では山の属性である木怪・山魃などが登場する「誤謬」が生じているのは、金自習が天磨山の瓢淵に舞台を設定したことが影響したものだろう。「龍宮」に追随した「上棟」でも同じ誤謬を犯しているが、そこでは木玉・山びこというより日本化された名称に変えられているのは日韓の妖怪文化の違いを示すものである。

「水宮」では物語の末尾に、龍宮で得た財宝を波斯商人に売って巨万の富を得たとする。これは唐代以降に流布した胡人採宝譚を踏まえたものだが、「龍宮」では削除されているのは主人公の清廉さを強調するだけでなく、韓国では胡人採宝譚に馴染みが薄かったからと思われる。「上棟」にないのは「龍宮」に追随したからだろう。

以上のことから、翻案にあたっては作者の置かれている環境（文化的伝統や社会的地位など）が作品の構成や表現を選択する際に大きく影響することを見出せる。このような作業は作者の視点から翻案小説の技法について解明するのに役立つものである。

#### 4. 研究成果

朝鮮儒統の成立に関する先行研究は多いものの、それが具体的に当代のいかなる社会・政治・文化的文脈のもとで形成されていたかという、ミクロな視点からの分析は殆ど無かった。その意味で新たな知見をもたらした論考として評価できるものであり、今後、このような試みの活性化をよぶ試金石ともなりうるものである。

筆者の風水研究は二十年の長きにわたるものであり、そのような長期的な研究は韓国でも極めて稀である。そのみならず、外国人研究者という「客観的」な視点からの考察は独自の分析や考察を可能にし、その意味でも貴重な成果をあげているが、今後さらなる発展と深化が期待できる。

古典における翻案小説の研究は二、もしくは三国間の比較研究が主であるが、多くの場合いわゆる文学的モチーフや主題の分析にとどまっており、その背後に存在する民俗文化的な考察に及ぶことは少なかった。その欠落を埋める意味で固有化の技法の比較研究は新鮮で豊かな知見をもたらす試みとして国際学会においても大いに注目されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

1. 野崎充彦「朝鮮道統形成の一側面 『東儒 師友録』を中心に」(『東アジアの都市構造と集団性 伝統都市から近代都市へ』(105~137頁清文堂 2016年3月) 査読なし
2. 野崎充彦「記憶の作法 現代韓国映画の地平」(『韓国朝鮮文化研究』14、171~195頁、韓国朝鮮文化研究会 2015年10月) 査読あり。

[学会発表](計 2件)

1. 野崎充彦「韓国の風水思想」(韓国道教学界 2015年6月26日 韓国)
2. 野崎充彦「翻案小説の技法について」(東アジア文学比較研究会 2016年2月16日 天理市)

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野崎充彦(大阪市立大学・大学院文学研究科・教授)

研究者番号：50244629

(2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号：